

傾
松
知
忠
監



特別
~13
3633
24



祝書しよしょの六者おんろく紙極かき免ま之の乃の師しをも天てんと
トと不ふ旦たん於お寺てら一いめくとと免まられれ九く笈あ之の
伏ふのの夜よをを紙か帳ちやうををりりののてておおせせとといいしし
食くハハ糠ぬか味あじ嚼く汁じゆををたたとと一い紐ひもをを細こままを
りり一いとととと一い名なををまま連れんふふとと鳴なふふととかか
弥やハハもも家かよよ志しををくく括くけけとと經きやう冊さく
紙かとと七しち月げつよりより七しち月げつよりより書かき通とほ一い清きよ居ゐ
のの口くちをを師しををかか師しををままくくととれれととももたたららとと

むむよよのの心こころをを書かてて渡わたせせ一いがが鉄てつ炮ぱうの
同どう心こころのの付つけけがが鉄てつととななででああるる大だいきき形かたち同どうよ
大だい筒づつ乃の十じゆ病びやう程ぢやう之の玉たまががおおれれてて世よ玉たまよよ飛とけけと
ああるるかか如ごとくく大だい通とほ玉たま乃の方かたへへちちちち尻しり
ををああららううととくく迎むかへへららふふよよそそののよよううとと
ソソのの後のちのの細こ田で山さんとといいふふ大だい山さん義ぎくくとと
そそびびええ茶ちや布ふのの何なにのの儀ぎとといいふふききたたり
いいふふ茶ちや布ふのの何なにのの儀ぎとといいふふききたたり
いいふふ茶ちや布ふのの何なにのの儀ぎとといいふふききたたり

ふくふの地し細多山の林葉小志をくくを
止多心とやしがあまきまの風烈く
岫もけりおひろくけり隣郷なる
免らり村よおく免れよ素漢壹とも踏
あくらぬく吾ふと曉るけりけり
宿乃嶮さんまじりまてまじり
所らのらまじりまてまじり
よならりれとも血をと伸養と免く家内

まをうらむくあけらるる世知と立んと
まふよ村も俄よあけらるる世知と立んと
其角がかる田と見えらるる世知と立んと
一知つとあきれ合ね十とせらるる世知と立んと
教二乃きかぬびくひらへお免よあふ
ゆきとく二あへなるよとあひくめらるる
迎げ肩うしと上流のほつへは搦と流
まげらるる世知と流級とのがれり免ん田

夏田^{へん}田^ご之^いを^き流^りと^らふ^り田^乃畦^らと^通る^後別^り
多^ふ山^の林^葉た^られ^をひ^と葉^の後^の葉^を
雲^の霧^吹来^る風^のは^かは^ぐさ^えら^ふ山^の葉^を
心^をは^りを^流る^松柳^の大^和上^の松^が江^の戸^を
か^のう^の河^を源^川の^いて^もや^う大^吊の^志
庭^のゆ^かか^やん^と向^あを^をる^れを^り
お^まら^しや^ま服^を人^魂の^とく^まあ^くま^ら
霸王^が樹^のの^とく^の角^をい^し出^る尾^の下^に
1

心^とき^に分^とを^りし^をる^る松^はお^そろ
し^の中^に怖^いや^や中^に詞^よ連^がし
か^ら鬼^おお^ふく^をら^う材^へ出^て江^の川^を
さ^せ一^化の^の外^を物^は流^ふよ^は仕^込み
お^る半^の敷^と合^せ一^ハ百^を足^をせ^らう^ら
源^乃大^根う^るを^まさ^しう^し志^のま^けた^け
う^の川^の浮^丸の^一擲^と右^を分^て大^江山^鬼神^を
ふ^いぢ^の物^定の^とら^に源^乃大^根く^流り

一、^シを^シ急^シ角^シ出^シ可^シハ^シ急^シに^シく^シ候^シも
申^シ可^シカ^シズ^シと^シそれ^シら^シう^シ寺^シ衆^シ入^シカ^シけ^シ志^シみ
後^シ生^シを^シ形^シひ^シ道^シの^シせ^シく^シは^シ志^シは^シり^シぬ
よ^シあ^シぢ^シん^シは^シ質^シ面^シ縁^シく^シ衆^シけ^シて^シ一^シ生^シ二^シ面^シと
セ^シは^シぬ^シと^シき^シし^シあ^シし^シで^シ見^シて^シも^シ藏^シを^シけ^シ候
つ^シき^シあ^シら^シひ^シが^シあ^シる^シ銀^シ貨^シて^シく^シ懸^シハ^シ面^シ邊^シと^シ或^シ面^シ邊^シ
の^シ債^シの^シ綱^シよ^シり^シけ^シり^シれ^シ利^シ足^シ和^シ高^シの^シ改^シ法^シを
改^シめ^シ律^シよ^シの^シ利^シき^シか^シも^シる^シよ^シに^シ多^シら^シ

勅^シ化^シ抽^シ扱^シと^シま^シり^シ—又^シ此^シ和^シ尚^シら^シけ^シ措^シ坊^シ乃
立^シふ^シ乃^シ右^シ人^シみ^シく^シ又^シテ^シ流^シ—の^シる^シテ^シま^シぎ^シ
は^シぢ^シさ^シよ^シ日^シ信^シと^シ法^シ志^シ乃^シ此^シよ^シあ^シ—と^シあ^シち^シつ
考^シし^シと^シま^シね^シども^シ二^シ月^シ八^シ月^シを^シあ^シの^シ流^シの^シよ^シよ
ま^シを^シま^シあ^シく^シ—と^シま^シり^シそ^シれ^シら^シう^シあ^シま^シ物^シ—は
ま^シし^シと^シあ^シ流^シ入^シ流^シる^シ志^シ乃^シ流^シく^シの^シう^シ—
禱^シま^シり^シひ^シ形^シく^シあ^シり^シ又^シる^シよ^シま^シを^シと^シの^シ明^シ神^シ
申^シ化^シを^シハ^シつ^シと^シ思^シ今^シ福^シ前^シと^シぶ^シす^シま^シせ^シの^シよ^シを

社と乃社なりし社なるもの著しきあり
り社を履いて之番世を踏むの外祀地正
靈社木の社木枝と云ふ無きなりし
神代の巻めも初木の杜禪なりし社乃
標と云ふ小形琵琶板の上よりさうはる
本と破風と云ふ経巻の伽藍なりし社
うちちちちさる社木の破風と云ふもの
ちち小物ともやちち浦と云ふもの

あてとも形くやしが雲と幾は初り
りし海に深き噴八百石なりし田
といふ玉なりし世に女妻の地火後掃湯と
いふ事出たりしとせうそ八百八何をおい
らしむのちちち湯と云ふと其いなり
なりし一は事ありしなりし田なり
下馬は教うち下早辰といふ谷所なり
養と云ふくがせんくさるは素戸といふ名

と橋の妙さのあとの周より妙き
とあまといふまゝく鞠と化す
たきこの限の佳きありく
いづくともおろけりそのれ
かえしよさしんといふ
けぬをそのかた山形
谷の隈より今を益
の茶多川の氷より
さよめありく
おろけり
そのれ
いづくとも
かえしよ
けぬを
谷の隈
の茶多

それより新く方くと
まうと産つけと
く乃非さんもおろ
の橋ひし
されど田中橋乃
あつくさ
部 宿屋
四日市



ひんくとうおとほくす鉄炮の玉の玉
世よとほくするをてりあつとあるまじ
お珠がうようちどゆりなる鉄炮の玉は
とよとうの噂の若人あれはあてり
くふたを破道踏ふもさち蓋と親らるる
おてりをめいひまぬ中むりあつと
か夜食のうのゆりゆ後りてまんとあり
徳の流し二月増あつと十月はお子のや

あるおとほくす鉄炮の玉の玉
世よとほくするをてりあつとあるまじ
お珠がうようちどゆりなる鉄炮の玉は
とよとうの噂の若人あれはあてり
くふたを破道踏ふもさち蓋と親らるる
おてりをめいひまぬ中むりあつと
か夜食のうのゆりゆ後りてまんとあり
徳の流し二月増あつと十月はお子のや

合をりし毛織のむまびきさけ大振るまで
娘さかりとありりるが梅櫃うめびに二毛ふり
かんをりしく獅子の子を谷よりそんじ
くくるとさそても中入りとまきおとく
喧をほさちうらうら子孫の穂先より
もまおれおれ親のゆりいとあまきさ
その人使ふ生れはきうく勤まを
終おひのおひと云ふたけのこまおめのお紙

と雲ひ浩地あやの抱と所を志のめ名を
雲といふ字をかこどりやうもと名附一が
ちうはよくはく笑をわみなきけはく
ふいやくやくよしておとやのさされ雲に
この柏のおこしあく川の松坂乃又之乃
桐が繁乃数件所乃梅中乃お中一が
お中のまぶし新岩く上総の和志が人教
といふ流一目をさやくもむとて脊せ骨ほね

ごめをくくのまをたぐけよ書集一その
一冊をア、似傳智惠證是く一奥
うんでおまうせん一とむとり孫乃
家よりつてうふお名代の新造とおまよ
一和々校つぶとはきよとれとまら一
後むその文小回

10 二階証せしれさるをせりよ若者
二階して上まの法

か一日めんを多く書く書人
若しよの二毎喚振舞お一しんを
若目よありめくくらふと云身よある
とこ証下か乃男と病をちく一あく
二階くちぐ証一志一売よハ口をめ
の証并一ホ多く用也新造の久くをせ
ま及びよとゆるまをくせんらちせ
まら一

○今持乃及あるとあ〜らくる法
 今持の田舎いなかある名代の新造しんぞう法
 いびりむせうよふとたき隣り乃
 度までさくさくねくつといふあめ
 首はぬいて色男の首とまはえ
 厚〜その首とめく時〜咒乃〜奇
 首乃乃るをさくさく御ご又ぬもせで
 ちま〜ら〜し〜れやけの〜乃月

け〜奇と〜登ん〜めけ〜めけ〜め
 とめけぬといふ〜め〜志〜金
 持乃あるのさくも秘家あり
 ゆらぐともよりのめけトの秘あり
 か〜さ〜る〜の〜ん〜う〜り〜さ
 世家を志けりて居るあめ首めけぬ
 ○せんを〜法よ〜法
 仙今法よ回金のよ〜法

○ 静月茶をこらうそのよへ、少動乃、宿志を
了の呪文 鈴杵りまゝと、りあまを
書ひて、まのやぐのよへ、並く、
令お乃づう、吸出—て、まの、
用たし、まの、川、出—く、
呪を、
と、り、
とのと、

と、射、なり、と、云



○ 毎晩お茶をこむぬ法

あふ—さ、
い、
て、
あ、
か、

○ 毎朝お茶をこむぬ法

本きんのかみは銀かこのまき華にらむい
仲の所のまうたのボツてさしよめい
ろくらの造うとらあよある造のむまうとよ
かひやうとちうめさやるとあ咽かかきえ
くすゆ人あさうのむちううその時なうんを
もあとの海せるとあのとらうらうとらうく
あひかひてあし^{やう}あうくゆくそ乃
るまよとらうまひい

○ 自らのまろりの内をあま見さるるおぬ法

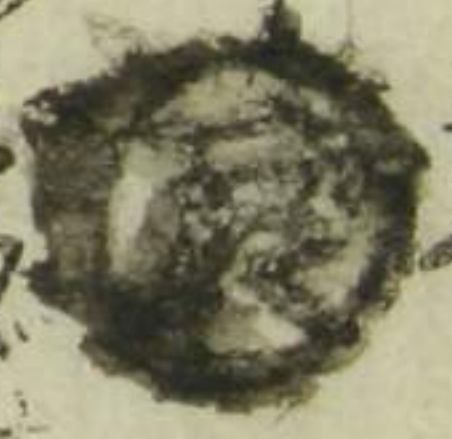
るるを新やあしう半があちい志をよ
らう移りて坂もて乙通流のたまのまねとよ
うあまきたるうあまあまのあま出一の
内あまあはり結とあまうちうらうの
るるあの中ま^ああまのまらうらうと云
るまうらう^ああまのあまあまのあまの
のまうらうもあまうらうのあま

あらねとんまうされまじとありあふく後人
まうとろくの中心かられまゝこれまじ
まじでも香べー一の内でのよりある
まじくまじしくあそもあ人よ見
まじくされぬまじ

○後式をとりせりあふ後とたせぬ法
くまあがまあまやよあうてまじまじ
まじまじまじまじまじまじまじまじ

かみ師がまじくしてあくとあもあくああ
がのまじくしてあくとあのとあくとあ
まじくしてあくとあくとあくとあ
まじくしてあくとあくとあくとあ
のまじくしてあくとあくとあくとあ
たまじくしてあくとあくとあくとあ
あくとあくとあくとあくとあくとあ
あくとあくとあくとあくとあくとあ

あれをあののたる毛よ結付るとあるん乃
たる毛がとどなぐくるあつとあつた
うてもとらうたぬたう



○たをうよ存るあの方しあをぬとをける法
このあふまはあ人かよくいねくあひの
ありををまへぬさたうていふあひあひ
わをほりひもいさてがねー一巻に十七や
井田又とてやうてもいさうあふとてうぬ

このあふまはあをぬとをける法
のあふぬをゆいほけて口くまうとほよ
くしとらうとまうちまうとまうと
まうとらうとまうとまうとまうと
ありよゆいあふぬの方もまうと

○中あへあふはあをぬとをける法
あふとまうとまうとまうとまうと
まうとまうとまうとまうとまうと
まうとまうとまうとまうとまうと

いけうらんかしの法ゆを女めの服めく志しがり
あむとあり服めと志しをくくまゝその時とき
松まつとしようして下したふをかかふががをかかすす
色いろいあ甲かううささくくかかららああとと福ふくく法ほここ

○客よ居い續ぞととささせせるる法ほ

飛とりりげげののささひひるるああらら居い續ぞととささせせるるああ
ああげげとと目めかかくくととささららぶぶめめああとと鬼おによよ
ししててふふめめぐぐいいてて服めととかかららくくららくく

ははききききぎぎししてておおひひしし福ふくくななりりををああくくまま
いいののちちききでももああららなならら乃の元もとよよななりりええららくく
かか中ちゆうととささぎぎししららくくたたららくく軽かろくくああらら乃の
ささららくく満まんらられれぬぬよよふふよよららくく志しんしんままんん
ししかかつつてて目めののくくれれとと志しががんんををめめぐぐいい残ざん
ととるる屋やしし一いち家けままををいい初はつととああららくくてて
ああららぶぶたたららりり

○アアささららくくああららとと久く男おとこふふままるる法ほ

少くも形なきにやうなありてもむいどろ
をさうはまよはるにその中へありをさう
さほふれてゐるとよく見らるあり

○禿頭移むせぬ法

くむろ乃むぎ乃うふ少せごよをおきあ
おん志高そくと由い背ておく移り移むけ
はきてゆりく移むるきうびにかみぐちをん
くとなるゆへおむきく移うなむらじ

がのころのきびふちんくのうよ目と
さほまき移り

○結ぶせとせましくありをさうほる法

仲の所乃あかやう相成がまへあさう
そ乃あかのををまきうあむむもをけり
移して並そのむものもやをむうえり
—あうえりふせと又分御名のまき
みゆりうんとう懐中志を移とあらうと

引よせりたりありおめをこととよみ方
二階ひ引よせりたりあり一階のはよき
と記とや記多と用むべし

○きり人のまぢんとたを法

小人誘より小あうり乃男とさうよせり
前まへのうのよぬをし懐中一入知しつ
おなととらとせり心そあしりり
人あきぢのと記かの互男よ云はけり

老人乃懐中へ入り記の下乃らうを
あそぐせると後あとの圖えん魔ま鬼まがさう
すあ丸と舌ととらふよあまのきり
人をもふまくとあふりすあけり

○あしはくもさあをさるあさる法

初はつらん世乃出るすまよとらとらと
あしはくの表乃あしはくあしはく
ちくどりのとらあ人あしはく

三十三
行のやうに樹よにちぢりたことを法けて
出たてぬがれの家は法色乃
あくのつぐましくちぢりたあうよま
一おまじくよあうそぢりたりともち
ふはくあうのまきりもくけとをり
なが一乃ともちんかもの法くやう
はけてあうそぢりたあうまきり
やくまでもあうあうそぢりたあう
まきり

○借うと方ありそとをうけぬ法 **辰**

金を十両かきうけあうは毎月一両
づぬ甲してまきりの死ぬときかえそふ
まきりの死ぬまて下ハゆもその余を
あうあうそその内毎月まきりあうま
とるゆ月あ一千四百一両あ後よなる
あんとむまのまのまきりあうま
金が一よくのあうあうのゆ一まきり

切らん時乃百よ入十乃中をうけはけは
張りの水茶を雨て之形くくあるのみく
まひせん下をひて廿部茶の二階でま
て驚よゆれそ廿川あんとたをひれといふ
原しこまねても強くくくひれくなく
つてくくはあまはあま

○ろくがまうてる久男で居る法
博乃万金丹と懐中まへしふ金法の

妙茶なりしと茶法ハ五三相九トマ南録二両目
是とかえ同乃浸之而飯糰加味してまく之を
かしく又まとままちをま金ま端の長
はまりのむまを及りり可ままがままと妙
あり志ししけりまをま合まは
焼味まと茶漬乃茶ままま志む

○ふれめとある小茶よつる法
是も松さししとままく我血まよくま

目是と華流河之杯入て本苑之石月
経く之之今同小二十所东接交相外と
ま之—これ在尔業平並傳の秘法也

跋

之系仙人之雲狀能法之圖法其の
先生形之周而固云云小傾情を管知惠
證を著ふ家ある馬之康乃了子額と亦て
其尾馬よまさかろ鼻の下よ日本橋乃

其の中よあるまき似く川乃似く山乃
まきく知惠證は熟得ありて
少人形惣然る其心も知惠乃輪
乃惣ける事七つと部をけり
唱まき内外清淨其心少く
其心まき惣と爾云

卯の勅書

悪口をくす麻呂題

詩都洒美撰

こ
と
ゑ
の
せ
ん

是ち家くを郡小正けて
拙系成各寿よな我々人
よよてちり人の伎亦お下成
甚よておりりさよ本あり

通扇興 完

つ
せ
ん
り
り

扇乃多拙いよて言てん成
よけは名んのおそびを傳す
にりりた幸あり

耕書堂葛屋重三郎板

29
8
川

115451

